《カトリック大和高田教会 お知らせ》　2025 年 4 月 13 日

典　礼　暦	日 時 など	
《 聖週間 》		
受難の主日(枝の主日)	4月13日（日）ベトナム語ミサ	15：00
聖木曜日	4月17日（木）ミサ	20：00
聖金曜日	4月18日（金）祭儀	20：00
復活の主日(復活の聖なる徹夜祭)	4月19日（土）ミサ	20：00
復活の主日(日中)	4月20日（日）ミサ	**8：30**
復活の木曜日	4月24日（木）ミサ	10：30
復活の土曜日	4月26日（土）ミサ	8：00
復活節第２主日(神のいつくしみの主日)	4月27日（日）ミサ	**8：30**

【中央協議会】

●**「カトリック新聞」が 3 月末で休刊となりました。**

4 月からはインターネットでの配信と、紙媒体として月一回の無料広報誌に移行しました。

【京都司教区】

◎**不審な郵便物にご注意下さい。**

「カトリック京都司教区・広報委員会信徒一同」を名乗った不審な郵便物が送付されています。（詳細は掲示板を参照）

●2025 年 3 月 1 日をもって、教区からお願いした新型コロナウイルス感染症についての措置を、すべて解除し、教会活動を 2020 年 1 月以前の状態に戻すこととします。

【大和高田教会の対応】

・マスクの着用やアルコール消毒の対応は各自の意向にお任せします。

・ホスチアの準備は、典礼部が行います。

・聖水盤をご使用いただけます。（典礼部が準備します）

【奈良ブロック】

◎2025 年度「聖書を学ぶ会」の受付が始まりました。

テーマ「希望の巡礼者の聖年」―信仰の道を歩む―

回	日　時	会　場	講師／「サブテーマ」
①	5 月 10 日(土) 10：30～12：00	奈良教会	**大塚喜直司教**(京都司教区)／「希望のことば」
②	5 月 31 日(土) 10：30～12：00	大和八木教会	**中川博道神父**(カルメル会)／「希望のしるし」
③	6 月 21 日(土) 10：30～12：00	大和八木教会	**奥村豊神父**(京都司教区)／「希望に錨を下ろして」
④	7 月 12 日(土) 10：30～12：00	奈良教会	**英隆一朗神父**（イエズス会）／「希望をあかしして生きる」

※聖書講座委員へお申し込み下さい。詳細は掲示板をご覧下さい。

【大和高田教会】

◎「聖書の分かち合い」(Sr. ローマ)：次回は 5 月 1 日(木)です。

(4 月 17 日、24 日はお休みです)

●国際協力委員会からのお願い：

「日本語教室」のボランティア・スタッフを募集しています。

(詳細はホール掲示板をご覧下さい)

カトリック
奈良ブロック
ホームページ

◆ **教会掃除当番**

4 月 13 日(日)ミサ後：Ｄ地区

4 月 19 日(土) 9:00 ：ＡＢ地区

本日の聖歌

入祭	典		**奉納**	典	
答唱	プ	{聖書と典礼}	**拝領**	典	
詠唱	プ	{聖書と典礼}	**閉祭**	典	

【典：典礼聖歌、聖：カトリック聖歌集、平：平和を祈ろう、プ：プリント】

4月13日　受難の主日　ルカ19章28～40節、23章1～49節　　苦しみをささげる王の姿

今日から次週の日曜日まで教会は「聖週間」として主の受難と復活を記念します。言うまでもなく復活は信仰の原点であり、典礼的にも一年の頂点と言われています。今日はその始まり「受難の主日」ですが、ミサの始めに主のエルサレム入城を記念するので「枝の主日」というほうがみなさんにはなじみがあるかもしれません。
枝の行列の際にはエルサレム入城の福音が、言葉の典礼においては受難の場面が朗読されます。これらの二つの朗読箇所を通して今日の主日の意味を考えたいと思います。

わたしはこの原稿を書くときに「毎日のミサ」を使っているのですが、聖週間と復活の八日間は別冊になっているのでちょっと困ります。司祭の集まりで「別冊をいちいち探さなあかんので不便だから聖週間も毎日のミサに載せてほしいと思いませんか」と言うと、「ちゃんと整理していないあんたが悪い！」と一蹴されました。そう言われたら、ぐうの音も出ませんね。ということで何とか別冊を見つけだして書いています。
今日の二つの福音は対称的です。枝の行列の前の福音はイエスが歓呼の声に迎えられてエルサレムに入るという晴れがましい光景でした。それに対し、ミサ中に読まれる福音は受難の朗読でイエスが罵声を浴びせられて十字架につけられるという悲劇的な内容です。
しかし、この二つの朗読には共通点があります。それは「イエスが王であるかどうか」ということです。エルサレム入城の際には弟子たちは「王に祝福があるように」とイエスを讃えます。マタイの福音では群衆が「ダビデの子にホサナ」と叫びます。「ダビデの子」とはイスラエルの王となる者であり、救い主を表します。しかし、その数日後、イエスは犯罪人として捕らえられ、ピラトから「おまえはユダヤ人の王か」と尋問されます。ローマ人で総督のピラトはユダヤ人を見下していたようで、彼にとっては「ユダヤ人の王」は軽蔑の意味がこめられていました。また、ヘロデ王もイエスを侮辱してピラトのもとに送り返します。ここではイエスが「王」であることが犯罪人のしるしとなっています。はたしてイエスのどちらの姿が王であるイエスを表しているのでしょうか。
受難の主日にはA年がマタイ、B年がマルコ、そしてC年の今年はルカが朗読されます。聖金曜日は毎年ヨハネの福音の受難の朗読です。そこでイエスは「わたしの国はこの世に属していない」とピラトに語られます。イエスにとって王とは、この世の国を支配する王ではなく、奉仕する王であり、人々のために自分を犠牲にする存在でした。その意味において受難の朗読のほうにイエスの王の姿を見ることができるといえるでしょう。

受難の朗読は、「この人は正しい人だった」という百人隊長の言葉で締めくくられます。マタイとマルコでは「神の子だった」と記されていますが同じ意味でしょう。このことは、異邦人に信仰が広まることのしるしです。つまり、すべての時代のすべての人のために苦しみをささげてくださった王の姿を表す朗読でもあるのです。　　（柳本神父）